

## 第19回2003年度総会 創造と挑戦を続ける未来派集団として、 さらなる活動の充実へ



去る6月12日（木）、KVBCの第19回総会が京都全日空ホテルで開催されました。開催にあたって藤関治清代表幹事から「ベンチャービジネスが生まれるためにはチャレンジ精神を持ち続けることが必要。KVBCの活動を通して事業化のモチベーションを高め、新しい発想を生み出していただきたい」と挨拶がありました。その後、2002年度の事業報告と決算・監査報告、2003年度の事業計画案などが審議され、いずれも滞りなく承認されました。



河合副代表幹事



井上副代表幹事



富田会計監事

### KVBC第19回総会次第 2003（平成15）年度

#### ◆第1部 14:00～

- 1.開会挨拶 代表幹事 藤関治清氏
- 2.議 事 第1号議案「2002年度事業報告・収支決算報告・監査報告」  
第2号議案「2003年度事業計画案・収支予算案」

#### ◆第2部 15:15～

##### 記念講演

演題 「バレーボールとベンチャー精神～夢に挑んだ8年～」  
講師 桑原 博氏（成安造形芸術大学名誉教授、国際バレーボール連盟名誉審判員）

#### ◆第3部 17:00～

##### 懇親会

ライブ 「和歌弾き語り～万葉集ロマンを歌う～」 阿武野達世氏

## 第1部

### ●第1号議案

2002（平成14）年度事業報告

2002（平成14）年4月1日～2003（平成15）年3月31日

#### 1 事業概要

2002（平成14）年度は、混迷した社会・経済情勢の中において、KVBCの更なる飛躍を目指し、事業内容の再検討、改善等に積極的に取り組むとともに、会員相互の情報交換や会員外の企業経営者等へのKVBCの活動を広くPRすることに取り組んだ。

##### (1) 全体会

会員相互の交流、情報交換の場として、「総会」では関西テレビ放送デジタル推進局長の平井誠氏をお招きし、「デジタル放送の現状と未来」と題した講演会、「経営セミナー」「京都の文化再発見」、年4回の「拡大企画セミナー（(1)ベンチャー的ものづくり、(2)ベンチャー経営の内部点検、(3)歴代京都ベンチャー大賞受賞企業に聞く、(4)環境をビジネスする）」など合計10回の全体会を開催した。

##### (2) プロジェクト企画

会員の参加活動の促進とKVBCの活性化のため、また興味あるテーマを少人数で研究することで、そのテーマを十分に掘り下げることを目的に取り組んだ。

##### [1] 人材ネットワークプロジェクト

人材ネットワークプロジェクトでは、人材に対する「確保・教育・定着・活用」というテーマで年間を通して研究、実践していくことを目指して事業に取り組んだ。（会員企業8社により、平成15年4月24日、京都タワーホテルにおいて「04KVBC就職フェア」を開催し、119名の学生の参加を得た）

##### [2] ものづくり研究会

大企業にない特性を生かした「ものづくり」を考えることを基本理念に、共同でのアイデア商品を開発。会員相互の理解と情報交換を進め、一泊研修会や工場見学の開催など合計14回の研究会を開催した。

##### [3] グローバル問題研究会

情報が氾濫する時代において、真実の情報を希求していくため、平成14年7月8日に本会を発足し、毎月、月例会報を発信し、情報交換を行った。

##### (3) 研修事業

2002年度は、以下の研修を行った。

##### [1] 経営セミナー&納涼会

アメリカのクラーク大学助教授の青山裕子氏を講師にお招きし、「日米ベンチャービジネスの比較と地域性」と題したセミナーを、京都しょうざんで納涼会を兼ねて開催した。

##### [2] 京都の文化再発見&忘年会

花園大学文学部史学科教授の芳井敬郎氏を講師にお招きし、「京都の文化再発見～その成立過程と構造～」と題したセミナーを、祇をん新門荘で忘年会を兼ねて開催した。

##### (4) 第16回京都ベンチャーセミナー

中部大学教授で工学博士の梅崎太造氏を講師にお招きし、「産学連携の失敗と成功のカギ～福祉・セキュリティ・ロボット技術に関連して～」と題した講演を、キャンパスプラザ京都にて開催した。

##### (5) 新規会員の開拓

KVBCを常に「新しい」クラブとして活力を維持し、これにふさわしい会員開拓を図るため、クラブのPRに努め、新規会員2社、新規賛助会員1社の入会があった。

##### (6) その他事業

KVBC機関誌「SHAKE HANDS Letter」の発行。会員企業の紹介やKVBCの活動を紹介する情報誌として、機関誌を毎月2,000部発行した。

### ●第2号議案

2003（平成15）年度 事業計画（案）

2003（平成15）年4月1日～2004（平成16）年3月31日

#### 1 基本方針

現在、我々を取り巻く環境は、長期に渡る不況低迷に加え、業種・業態を超えた競争が激化するなど、先行きの予測が困難な状況にある。しかし、こうした環境であるからこそ、これまでになかった新たな発想が生まれ、報われる機会が広がっている。ベンチャー企業にとっては成長へのチャンスのと看でき、KVBCの真価が問われているのである。

KVBCは、世界に向けて創造と挑戦を続ける未来派集団として、また会員企業のベンチャースピリットの高揚と研鑽の場として、クラブの充実と会員企業の資質向上のための活動に取り組んでいかなければならない。今年、昨年度から開催している拡大企画セミナーに積極的に取り組むとともに、新たな時代に合わせた取り組みを展開していくものとする。

#### 2 事業執行体制

これまでに引き続き、基本的にはKVBCの諸事業を次項で説明する4つの事業に再編し、4名の副代表幹事と幹事がそれぞれの事業を担当することによって、責任体制の明確化、効率的な事業の推進を図るものとする。

#### 3 重点事業

##### (1) 企画広報事業

##### ア 総会

- ・通常総会、臨時総会の運営、議事進行を行うとともに、併設事業の講演会や懇親会等を企画、実施する。

##### イ 機関誌（SHL）の充実

- ・機関誌シェイクハンズレターの内容を企画、充実していくとともに、将来のペーパーレス化に向けて検討していく。

##### ウ 新規会員の開拓

- ・会員企業数100社を目標に、あらゆる手段を駆使して、KVBCにふさわしい会員の増強に努める。

##### エ 拡大企画セミナー

- ・会員企業及びKVBCのPRと会員拡大事業の実施

##### オ その他

- ・ホームページの機能充実、利用促進、維持管理
- ・企業名鑑の発行
- ・新規会員の開拓、広報
- ・展示会出展等の企画、広報
- ・他団体への広報

##### (2) プロジェクト事業

興味あるテーマをまとまりやすい少人数で研究することにより、そのテーマを十分に掘り下げるとともに、会員間の交流を深めることを目的として実施する。各プロジェクト事業は、少なくとも1名のKVBC役員が参加するか、そうでない場合は書面において月1回の活動報告を行うものとし、4名以上のKVBC会員で組織するものとする。

- ・ものづくり研究会
- ・人材ネットワークプロジェクト
- ・グローバル問題研究会

##### (3) 研修事業

##### ア 宿泊研修

- ・経営の諸問題をテーマとして講師を招いたセミナーや見学会、視察等を企画する。

##### イ 経営及び技術セミナーの企画、実施

### 2003（平成15）年度役員名簿

代表幹事	藤関 治清	(株) ユニシス
副代表幹事	河合 康博	アド・プロヴィジョン (株)
〃	仲 良二	(株) ケルクセキュリティシステム
〃	井上太市郎	(株) スリーエース
〃	西谷 謙二	(株) 和光舎
幹事	有川 晴彦	アーク・テクノロジーサーチ (株)
〃	中村 史門	(株) アルファ・プリント社
〃	清水 隆二	(株) エスケイショップ
〃	岡田 啓史	(株) キャット
〃	吉村 賢	(株) 京都インテリジェンスサーチ
〃	田中 正道	シーク電子工業 (株)
〃	中川 茂之	システムプロデュース (株)
〃	猪飼 昭嗣	(株) ゼロワン
〃	川端 克裕	大洋エレクトクス (株)
〃	田中 峰子	(株) 富田屋
〃	土井 達也	日本コンピュータファシリティ (株)
会計幹事	富田 尚男	富田尚男税理士事務所
〃	日比 昌孝	日貴電子 (株)
顧問	島田 與三右衛門	京都市産業観光局長
〃	西川 禎一	(財) 京都高度技術研究所理事長
〃	堀場 雅夫	(財) 京都高度技術研究所最高顧問
〃	立石 義雄	(財) 京都産業21理事長
シニア会員	カウンセラー	辻 理 ((株)サムコインターナショナル研究所代表取締役)
〃	カウンセラー	西河 勝男 ((株)暁電機製作所代表取締役)

[第2部へ>>>](#) [第3部へ>>>](#)

□

□

□

## 「バレーボールとベンチャー精神 ～夢に挑んだ8年～」

桑原 博氏

成安造形芸術大学名誉教授、国際バレーボール連盟名誉審判員



自らの体験談をジェスチャーを交えて講演される桑原氏

総会に引き続いて行われた記念講演では、日本のバレーボールの技術の世界水準まで高めた桑原博氏をお招きし、1972年のミュンヘンオリンピックで金メダルを獲得するまでの努力とそのベンチャー精神についてお伺いしました。

### ◆金メダルを目指して、日本チーム再出発

バレーボールが世界的な競技として認知されるようになったのは、東京オリンピック（1964年）のときです。日本の男子チームは銅メダルを獲得して注目されたのですが、世界の強豪チームに比べてまだまだ選手層が薄く、またオーバーネットのブロックを許容する国際ルールによって、身長の高い日本人選手は非常に困難な試合を強いられました。そこで私たちは8年後のミュンヘンオリンピックで金メダルを獲得することを目指して、選手の育成や日本独自の技術、戦術を開発することにしたのです。東京オリンピックの翌年に4つの国際大会が予定されており、日本チームの再スタートとしてはいい時期だといえました。

私たちが最初に取り組んだのは、文字どおり大型新人の育成です。当時の日本男子チームの平均身長は185cmぐらい。世界レベルに対抗するために、身長190cm以上の選手を発掘して育てようと考えました。もう1つは、ヨーロッパで盛んになっている運動医学を取り入れた科学的トレーニングの実践です。体力測定やボールのスピード測定などをデータ化したほか、バレーボールに必要な敏捷性、巧緻性などを高める基礎トレーニングを徹底しました。また、専属のトレーニングドクターを採用し、選手の体力や能力に応じた個人メニューを用意することで、無理なく技術向上が図れるように配慮しました。

その中でも、私に課せられた役割の1つは「審判レベルの向上」ということでした。ヨーロッパ人は台の上に座って審判をしますが、私は台の上に立ち全神経を集中してボールに注意を払います。あるとき、ボールを蹴飛ばした選手がいたのでホイッスル（笛）を吹いたところ、「反則でもないのになぜ笛を吹いたのか」とヨーロッパ人の審判長に問われました。私が「ボールを蹴るのはマナー違反である」と理由を説明したところ、「それは日本だけの“ローカルルール”だ」と笑われたことがあります。しかし、1966年に開催された第6回男子世界選手権大会（チェコ・プラハ）ではベストレフェリー賞を受賞することができ、日本の審判技術・地位の向上にも貢献することができたと思います。

### ◆オリジナリティを発揮し、独自の戦法を開発

さて、スタッフ・選手たち一丸となった取り組みの中で生まれたのが、当時社会現象にまでなった「回転レシーブ」という新戦法です。強豪ソ連の強打を防ぎ、国際大会では連戦連勝を記録した画期的な戦法でしたが、バレーボールの世界でもだんだんとスピードアップが図られ、回転レシーブが通用しなくなってきました。ネットからエンドラインまでボールが飛んでくる速さは男子で約0.35秒。ところが、科学的な測定を行ってみると、選手がレシーブの構えに入ってボールに飛びつくまでの反応時間は約0.348秒だということが分かりました。これでは回転レシーブで対応していたのでは絶対に間に合いません。わずかコンマ数秒の闘いが始まりました。私たちの発想は、「とにかく、がむしゃらに飛び込んでいけば何とかなるだろう」という単純なものでした。選手を壁に向かわせて、背中からいろんなボールを投げ、瞬間的に反応させるというトレーニングを繰り返し行いました。こうして生まれた新戦術が「フライング・レシーブ（マッハ・レシーブ）」だったのです。この戦法は1968年のメキシコオリンピックで素晴らしい効果を発揮し、ソ連やチェコ、ポーランドなどの強豪チームから一躍注目を集めることになりました。

目標としていたミュンヘンオリンピックでは、残念ながら女子チームは金メダルを逸しましたが、男子チームは見事に優勝してバレーボール王国としての礎を築くことができました。これは、スタッフ・選手一人ひとりがオリジナリティ（独創性）とスペシャリティ（技術）、そしてパーソナリティ（個性）を発揮して、大きな目標に向かって全力を傾けることができた結果ではないかと思えます。そしてチームワークは日本独自の「コンビネーション」という緊密な関係プレーを生み出す原動力となりました。まさにこれこそ、ベンチャー精神そのものではないでしょうか。ぜひ、KVBCの皆さんもそれぞれの技術、個性に磨きをかけ、ベンチャービジネスの世界で金メダルを目指していただきたいと思えます。

[第1部へ>>](#) [第3部へ>>](#)

□  
□  
□

## 懇親会

◆京都市産業観光局  
島田興三右衛門局長の挨拶

中小企業の皆さんに元気になってもらうために、産業観光局では様々な活性化事業に取り組んでいます。まず1つは、金融面から優秀企業を支援するために、府とともに4月末から「中小企業あんしん借換融資」制度を創設。わずか3カ月で約1300件600億円の融資を実行し、市内の中小企業の倒産件数を減少させることができました。もう1つ、将来に向けた産業活性化策として、昨年から独創的な中小企業に対して「オスカー認定」を行い、すでに21の企業が認定されています。そのほか、産学公連携を視野に入れた事業にも取り組んでいきますので、ぜひKVBCの皆さんのご協力をお願いします。



島田興三右衛門局長

第3部の懇親会に先立ち、来賓を代表して夔京都高度技術研究所の山崎徹朗事務局長が登壇し、「ASTEMは昨年7月、京都ナノテククラスターの推進本部として位置づけられました。ナノテクを中核技術として京都の活性化を進めたいと考えていますので、KVBCの皆さまにもぜひ参画をお願いいたします」と挨拶されました。引き続き乾杯の挨拶に立った、京都府商工部産業活力支援室の山下晃正室長が「閉塞感を突き破るのは、ベンチャー精神あふれる“イノベーター”です。KVBCのますますの活躍に期待しています」とエールを送ると、会場から大きな拍手がわき起こりました。

懇親会では、阿武野逢世氏による万葉集を題材にした和歌弾き語りが行われ、なごやかな雰囲気の中で会員同士の交流が図られました。



山崎徹朗事務局長



山下晃正氏



阿武野逢世氏によるライブ

## 2003 KVBCオープンセミナー

本シリーズセミナーでは、起業される方や既存の企業経営者の参考になるテーマを

取り上げ、KVBC会員や京都の中小企業、一般からの参加者も得て開催するものです。（会場：キャンパスプラザ京都）

7月23日（水） 第1回オープンセミナー 「我が社の特許戦略と事業展開」  
[18:00~19:45]  
ハイデック（株）フジヤマ技研（株）ハイパーテック（株）清弘エンジニアリング

第2回 10月1日（水）「伝統をベースにした新展開」

第3回 11月26日（水）「資金計画のヒント」

第4回 2004年1月27日（火）「物販業のベンチャー的視点」

[第1部へ >>](#) [第2部へ >>](#)

□

□

□